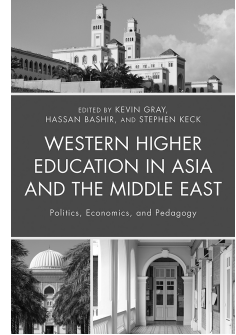


◆書評◆

Kevin Gray, Hassan Bashir, and Stephen Keck 編

*Western Higher Education
in Asia and the Middle East
Politics, Economics, and Pedagogy*

(Lexington Books 2017年 ISBN: 978-1-4985-2600-5 US\$95.00+税)



鳥山 純子

(立命館大学 国際関係学部)

2015年時点、世界には232のブランチ・キャンパスが展開されている(38-39頁)。ブランチ・キャンパスとは、主にアメリカ合衆国、イギリス、オーストラリアの有名大学が海外において運営する大学組織をいう。本書は、現在その多くが集中するアジア・中東地域における欧米起源の高等教育機関に関する社会科学的分析を取めた論集である。その目的は、グローバルに展開する高等教育機関の発展を辿り、それが直面する課題や貢献を整理・分析すること、さらには、グローバルな知的経済の時代における高等教育機関考察の切り口を見出すことである(xv頁)。結論を先取りするならば、各章で繰り返し唱えられるのは、高等教育機関を考える上での、政治的、経済的、教育的様相に目配りすることの重要性である。本稿では、エジプトのインターナショナル・スクールを研究する筆者の立場から、本書の概要提示と簡単な批評を試みたい。その中心となるのが、筆者が研究対象とする中東地域の考察であることは、ここであらかじめお断りしておきたい。

「はじめに」で指摘されるのは、アジアや中東で運営される欧米起源の高等教育機関もまた、1)学生の消費者化、2)政府助成金の削減・凍結、3)新たな大学マネジメント方式の導入、4)労働人材育成への期待の偏り、5)授業内容の変化と授業形態(遠隔授業など)の変化、といった大学の在り方をめぐる超地域的な近年の動向のもとに運営される現実である(xi-xii頁)。

第一部は、「第1章、大学を学生にとって安全な環境にするために—1910年から1925年の南アジアの事例から(Stephen Keck著)」、「第2章、アラブ湾岸諸国のグローバル・ユニバーシティー目的と統治の異動と変遷(Kevin W. Gray and Hassan Basir著)」、「第3章、ネオリベラルな知の帝国主義—ネオリベラル時代の教育と支配(Adeela Arshad-Ayaz and M. Ayaz Naseem著)」の3章からなり、グローバルに展開する高等教育機関が、歴史をもつ現象であること、国家の欲望がネオリベラルな課題と知の帝国主義と結びつき、高等教育の在り方に影響を与えてきたことが示される。

第二部は、「第4章、リベラルアーツ教育—海外の先例に学ぶ (Jerry Logan and Janel Curry 著)」、「第5章、アラブ首長国連邦とカタールにおける政府による高等教育の管理—ゆらぐ公立と私立の境目 (John Willoughby and Fatima Badry 著)」、「第6章、アメリカのリベラル教育の展望と、グローバル化の課題—問題発見的知見 (Mark Rush and Bryan Alexander 著)」の3章からなり、グローバル化のもとでの高等教育機関の変遷が分析される。それはたとえば、香港におけるアメリカ型のリベラルアーツ教育を通じたアイデンティティ形成の動きや、カタールの政治体制のもとに生まれた私立大学／公立大学の区分の揺らぎ、アメリカ本国の大学規範と地元の規範の衝突という形で表出する。

第三部は、「第7章、中国における海外大学との共同運営高等教育機関—中華人民共和国におけるトランスナショナルな公的認証高等教育資格授与プログラムの検証 (Michael Gow 著)」、「第8章、ワールドクラス大学の創出—サウジアラビアの高等教育システム (Amani K. Hamdan 著)」、「第9章、ボローニャプロセスとアルジェリアにおける高等教育改革 (Boufeldja Ghiat 著)」の3章からなる。ここでは、第一部、第二部で明らかにされたグローバル・ユニバーシティの課題が、国家の教育認証制度と独自の社会的文脈のもとに描き出される。中国では、中央集権的な官僚制度によってプログラムの閉鎖や資格はく奪が相次いでいる。サウジアラビアでは、大学運営に関わる人的資源の確保と設備の整備が急務である。

さらにアルジェリアでは、EUの教育システムへの統合を図るが、国際的な高等教育質保証認証制度の破綻によって思うような成果を上げられない。

第四部では、新たな教育方法ともいわれるオンライン・ラーニングを「第10章、大規模公開オンライン講座 (MOOC) とオンライン・ラーニング—機会の拡大と課題 (Mohanalakshimi Rajakumar 著)」で取り上げ、グローバルな高等教育機関でのMOOCの可能性と、課題が示される。

第五部では、「第11章、大学とその価値—中東とその先に広がる高等教育 (John Ryder 著)」、「第12章、自らの根幹の危機—名誉、規律、そして権威的スペース (Nancy Small 著)」、「第13章、大学の危機に関する解釈学的回答—グローバル・ユニバーシティにおける『優秀さ』の問題 (Thorsten Botz-Bornstein 著)」の3章で、グローバル化する高等教育機関が抱える多様な問題が語られる。第11章では高等教育機関の経済価値、商品価値、学術価値が同等に重視されるべきこと、第12章では、アラブ湾岸諸国にアメリカ本土の規律を持ち込むことの限界が、第13章では、アラブ湾岸諸国において経済的に利用価値の高い技術取得ばかりが望まれる実態が、各々明らかにされる。

本書の大きな特徴は、国家、資本、知という三つのアクターとそれらの関係から、高等教育機関を捉えようとした点である。第11章の著者ジョン・ライダー (John Ryder) によれば、高等教育機関の存在意義は教育的 (教育・学術的) であるに留まらず、政治的 (社会・政治的)、あるいは経済的 (経済・

商業的)でもあり、それらには同等の重要性がある(207頁、212-215頁)。具体的な考察対象とされるのが、国家、資本、知とその関係性である。

本書の意義は、グローバル化の強い圧力にさらされる高等教育機関の意義、実態、課題を、上記3つの要素を意識し、包括的かつ地域間比較が可能な議論の枠組みを提示した点にある。これより、アラブ湾岸諸国での大学運営における国家からの資金援助の重要性、実践的技術への偏った期待、欧米とは異なる知の獲得と規律の在り方、さらには国家に批判的な思想への圧力といった特徴がみえてくる。しかしながらこれらの指摘は、とりたてて新しいものではない。

ここでは、知見の多くに新鮮さが欠けた原因として、アプローチの問題を指摘したい。本書では教育・学術的文脈の議論において他の2要素への目配りが推奨されている。しかしながら、社会・政治的、経済・商業的、教育・学術的という要素は、むしろ位相として捉えるべきものであり、それぞれの位相において高等教育機関を議論し、つき合わせることで、今までにない新たな知見を見出すことができるように思われる。筆者の専門であるエジプトでは、こうしたアプローチのもと、世銀、IMF、政府間のやり取りに注目し学校教育法の変遷を議論する著作も刊行されている。そこでは、開発の要と目

される教育でも、構造改革の対象となり、経済支援と引き換えに犠牲にされることが詳細な考察により説得的に示されている(cf. Sayed 2006)。グローバル・ユニバーシティであればより一層、その導入における政府や国際機関の各々の思惑や、大学側からの政治的働きかけがあったはずである。この点を丁寧に描き出せれば、高等教育機関だけでなく、それをとりまく社会環境の議論にもつながるより意義深い知見を生み出せただろう。

最後に、同様の指摘がジェンダーにも言えることを記しておきたい。残念ながら、本書ではグローバル・ユニバーシティとジェンダーの関係についての記述はほとんどない。性別に言及する数少ない記述でも「女性と高等教育」が要素として簡便に触れられるに留まり、そこに注目した分析はない。通常男女の隔離が前提とされるアラブ湾岸諸国での共学の実施や海外留学せずして欧米型教育を受けられるグローバル・ユニバーシティの普及が現地のジェンダー規範に働きかけ、あるいは現地のジェンダー規範がそうした大学の規律に働きかけるであろうことは想像に難くない。さらなる議論の先鋭化において、ジェンダー視点、すなわちジェンダーを切り口とする事象分析の可能性を指摘しつつ、本稿の結びとしたい。

参考文献

Sayed, Fatima H., 2006, *Transforming Education in Egypt: Western Influence and Domestic Policy Reform*, Cairo, The American University in Cairo Press.

(掲載決定日：2018年4月4日)